

千葉県指定有形文化財  
常灯寺本堂保存修理工事  
竣工を祝して

常世田薬師奉賛会

# I 概要

## 一 常灯寺の概要

### (一) 創立と沿革

銚子市常世田町に所在する常世田山常灯寺は、真義真言宗智山派の寺院である。創建は奈良時代、行基菩薩が東国巡錫の折、香取郡織幡の銘木杓子桜を取り寄せ、薬師如来を造像し現在の本尊としたことに由来すると伝える(『千葉県海上郡誌』第五章第四節三、以下『郡誌』と略す)。本尊は、常世田薬師の名で信仰を集め、現在も初薬師には大勢の人々で賑わっている。

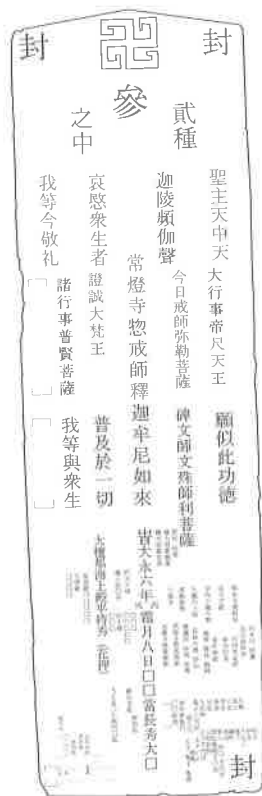
常灯寺の寺号を史料上最初に確認できるのは、現在も同寺に保存されている大永六年(一五二六)の棟札である(第五章第一節一)。しかし、本尊の薬師如来が平安時代末期・鎌倉時代初期の像であり、またその像容が裳懸座に坐すという古様を示すことから、それ以前より薬師像を安置した仏堂があったことは間違いない。

現在の境内は、後方を台地とした湧水豊富な常世田町の奥に位置する。地元では、大昔は背後の台地上に寺があり、いつごろからか現在地に移転したと言われている。この伝承は、明徳年間(一三九〇～一三九四)に風雨により堂宇が破壊され、応永元年(一三九四)の移転伝承(『郡誌』)を物語っている可能性がある。

中世の常灯寺については、鎌倉時代から江戸時代後期までの書写年代を記す大般若経と、薬師如来像の仁治四年(一二四三)修理銘、大永六年の

何らかの堂宇建設に係る棟札がある。大般若経については、鎌倉時代の識語は常陸国僧侶が書写したことを示すものだが、常灯寺の寺号までは見いだせない。中世末期の識語には、当地および周辺の僧侶によって書写が実地された識語が複数巻で確認できる。仁治四年の薬師如来像修理は、当地の三崎庄で勢力をはっていた東氏一族の海上胤方の妻および親族が願主となり、勧進によって多くの喜捨を集め、仏師豪慶によって成就したものである。常灯寺は海上氏の庇護のもと薬師像の修理を遂げたが、海上氏との関わりはその後も続き、大永六年の堂宇建設につながっていく。

大永六年の棟札には、「大檀那海上殿平持秀(花押)」と海上持秀の名を筆頭に「箕番殿」「蔵人佑口秀」「同大方様」などの武家、「大工」「鍛冶」の工匠名が見える。何らかの堂宇建立か修理が行われた記念の棟札である。文字は小さいが、庶民の女性と思しい名も記され、貴賤を問わない上下の信仰を集めた事業であった。



大永六年棟札

江戸時代になって、常灯寺の伽藍整備は進むようになる。

元禄元年(一六八八)に仁王門(現存)、延享四年(一七四七)に境内社の白山神社本殿(現存)、宝暦十一年(一七六一)には鐘楼が建立(現存)される。また、慶長十二年(一六〇七)には、薬師如来の眷族である十二神将の再興(棟札)、元和七年(一六二二)には大般若経の和櫃製作(刻銘)